様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２８日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：21653017
研究課題名（和文）　経済学と倫理：社会の成立と市場の勃興に見る「制度と規範の一般理論」の構築
研究課題名（英文）Economics and Ethics: A Construction of the General Theory of Institution and Norms from the viewpoint of the Establishment of the Modern Society and the Market
研究代表者
浦井　憲（Urai Ken）
大阪大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：00203597

研究成果の概要（和文）：　人間社会における「市場」の果たす役割を、歴史的・方法論的な方向、統計学的な方向、といった多方面からの視野を補いつつ、「純粋経済学理論的観点」を中心とした「社会理論」の中に位置づけることを試みた。国民国家といった近代の枠組を超えるものとして、「市場」を定位させるための筋道を与え、その基礎理論を固めた。当該研究はまた「経済学と倫理」という主題と深い関連を保つ形で取り扱われた。

研究成果の概要（英文）：In this research program, we construct a basic general theory of the market as a part of social theory that may or may not depend on the modern framework or concepts like nation states, price adjustment mechanism, and/or homogeneous labor, under pure theoretic (mathematical-economics) viewpoints together with historical, methodological, and statistical perspectives. It is also possible to classify our results in topics for the important recent arguments about ``economics and ethics.''

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,200,000	0	1,200,000
2010 年度	1,000,000	0	1,000,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	300,000	3,500,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：経済学・理論経済学
キーワード：　経済理論、経済思想、経済学方法論、経済学と倫理、市場と社会、数理経済学、一般均衡理論、経済学と数理

１．研究開始当初の背景

一般均衡理論をその骨格に据える今日の経済学理論において、「市場」という言葉はすでに非常に厳密かつ固定された意味を与えられてしまっている。今日、経済のグローバル化といった文脈で、そして市場原理といった言葉で語られる場合もまたそうである。今日の経済学（スミス以降）は近代における「社会」という概念とともに、そしてその社会におけるメカニズムとしての「市場」という概念とともに、「近代社会」の学として成立してきた。けれども、本来「市場」というものは、近代的「社会」の成立以前から我々が時

を経て創り上げて来たものに他ならず、それはまさしく洋の東西を問わない、人間の自由な活動の中に位置付けられるべきもののはずである。F.A.ハイエクがかつて「市場」を指して「自生的秩序」といった表現を用いたことは、そのような市場の意義をとらえてのことであったに違いない。「人間」のあるべき姿、「自然」な要求、「自由」なる活動、として、広く市場とは何かを位置づける。それは必然「経済学と倫理」という問題の中枢として、この「市場」と「社会」の成り立ちを捉えるということであり、「制度（市場）」と「規範（倫理）」の相互的関係に着目するということであるとも言える。近年、経済のグローバル化、貧困飢餓といった問題とともに、「経済学と倫理」はますます必要な課題テーマとなりつつある。この主題に向けた近年の重要な議論としてはアマルティア・セン On Ethics and Economics (1987) のプログラムがあり、それは技術的な側面 engineering approach としての従来の経済学的議論を生かしながら倫理的問題に踏み込んで行くべきという提唱である。しかしながらそこで主として語られることは「倫理学的側面に注目して従来の経済学理論を用いる」というレベルの話に他ならず、それは「倫理学と経済学」のいわば「足し算」の域を出ない。「倫理と経済」の間に「相互の働きかけ」を見出すとか、従来の経済学理論の立ち位置を変えて倫理に踏み込む、という（本研究の目的）想定には残念ながら全く達していない。

２．研究の目的

本研究の目的は、経済学が倫理といかに向き合わねばならないかということについての純粋理論を構築するということであり、その鍵として「社会」を成立させるものと「市場」との関係を捉えるということである。本研究の目的のためには、方法論的視点（哲学的視点）、歴史的視点、統計的視点、そして純粋理論的視点（数学・論理学を含む）を統合して、これに当たらなければならない。これは「経済学と倫理」という、新しい分野の基礎を構築するということでもある。

３．研究の方法

本研究の中心は純粋理論的研究にある。一般均衡理論的に公理化された「市場」概念からその近代特有の要素を剥ぎ取り、その本質にのみ基づく部分を、あくまで人類の歴史の遠い流れの中に見出すことにより、ハイエク的な自生的秩序（おそらくその合理性概念や個人の概念においてより一層の洗練化が必要となるであろうが）と言うべき「市場」の何たるかという問題に帰着させるのである。より具体的には、代表者の研究（合理性および社会認識と一般均衡理論）に対して、分担者のアダム・スミス、ヒューム研究（情緒・倫理の問題と経済学）、歴史的かつ統計的な問題意識と手法を起点とし、加味しながら、市場の概念、歴史、意義を再構築し、ひいては「経済学と倫理」という分野の基礎を構築するのである。

４．研究成果

哲学・思想的観点から、個人の合理性ならびに社会における価値の問題が、今日的な分析哲学あるいは倫理の哲学、哲学的人間学（H.パトナムやE.レヴィナス、A.ゲーレン）などを中心にまとめられ、本研究の骨格をなすような形に、モデルの基礎として、また将来的な経済学理論の基礎を形成する考え方として、位置づけられた。そういった考え方と並行して、プラグマティズム、西田哲学、量子力学的世界観なども（全と個、社会と個人、主観と客観といった二元論の克服という意味観点から）適宜、重要な位置づけを持つものとして本研究の基礎に位置づけられた。（研究代表者の２０１０年著書 Fixed Points and Economic Equilibria 第 9 章および第 10 章における合理性の定義をめぐる不可能性の定理ならびに社会的価値の定義をめぐる不可能性の定理は、純粋数学公理的な本研究の立脚点であり、それに続く議論はその後の哲学的・思想的展開を示唆し、促すところのものである。研究代表者の２０１０年のエッセイは、研究分担者堂目卓生の前年における学会報告「経済学の基礎としての人間研究」の内容や、同じく研究分担者竹内惠行の著作「現代統計学が２０世紀に与えた影響」を受けて、上述した本研究の哲学的・方法論的基礎について、まとめたものである。「経済学と倫理」として我々が基礎を置いた哲学・思想については、やはり２０１２年の研究代表者浦井憲と連携研究者の吉町昭彦による著書『ミクロ経済学-静学的一般均衡理論からの出発』においても、序章、1 章、ならびに最終章とつながる一連の議論の中で解説されている。）

また、上述した基礎から、今日的な動学的一般均衡理論およびモデルのあり方に再検討が加えられ、動学モデルの背景にある個々人の思考とそういった思考がもたらす普遍性としての制度（信用・貨幣）ならびにそのダイナミクスを与える毎期結託形成型の一般均衡モデルが構築された。（研究代表者の２０１２年著書においては、動学的一般均衡問題に向けて静学的理論からの越えること

の困難な壁ともいえる問題点が詳細に取り扱われている。またそうした問題と貨幣（信用）という問題の深いつながりも、同書における中心的テーマの一つである。また同書においては、上述の基礎においてはまだ触れられていなかった重要な視点「社会と社会外」についても触れられている。「社会外」の概念を除き、こういった貨幣（信用）の動学問題を「一般均衡モデルと安定的な結託との複層均衡」としてとらえるモデルが、研究代表者浦井および連携研究者吉町によって構築され、２０１１年１０月慶應義塾大学にて報告されている)。

本研究の哲学的基礎となった「個々主体の認識論（合理性)、全体における存在論（価値)、そしてそれらを統合しつつ発展させる思考としての方法論（倫理)」という哲学的立場は、今後に向けて研究代表者、分担者、そして連携研究者等の間で共有されており、具体的には数理経済学の学会における方法論部会の設立といった活動方向に向け進展中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

竹内惠行、書評：The Cult of Statistical Significance: How the Standard Error Costs Us Jobs, Justice, and Lives. (by S.T. Ziliak and D.N. McCloskey)、『日本統計学会誌』第41巻シリーズＪ第１号, （2011）, 247-248、査読有

浦井　憲、経済学と不動点定理、経済セミナー、10・11 月号、(2011)、日本経済評論社、50-56、査読無

堂目卓生、経済学の基礎としての人間研究、日本経済学会７５年史-回顧と展望-、査読有、(2010)、有斐閣、第９章、367-402

浦井　憲、今日の社会科学と量子力学的世界観、数理経済学研究センター会報、第 42 号、(2010)、1-13、査読無

浦井　憲、アダムスミスと存在論なき倫理、数理経済学研究センター会報、第 41 号、(2010)、1-13、査読無

浦井　憲、社会科学の理論とプラグマティックな立場、数理経済学研究センター会報、第40号、(2010)、4-15、査読無

浦井　憲、純粋理論としての経済学と倫理、数理経済学研究センター会報、第 39 号、(2010)、1-6、査読無

Ken Urai, Akihiko Yoshimachi, Kousuke Yokota, *Financial Structure and Social Coalitional Equilibrium*, Discussion Paper, No.09-41, Graduate School of Economics, Osaka University, (2009), 1-16、査読無

〔学会発表〕（計３件）

浦井　憲、General Equilibrium Market Dynamics with Social Coalitional Equilibrium Structures, Research Center for Mathematical Economics, 2011.10.24, 慶應義塾大学

堂目卓生、経済学の基礎としての人間研究：学説史的考察、日本経済学会、2009.10.11、専修大学

竹内惠行、業専門学校における科学的管理法教育 －製糸・紡織系学科での導入・内容・効果の考察－、経営史学会、2009.10.3、京都産業大学

〔図書〕（計３件）

①浦井　憲・吉町昭彦、ミネルヴァ書房、『ミクロ経済学-静学的一般均衡理論からの出発』、(2012)、総 350 ページ

②Ken Urai, World Scientific Publishing, *Fixed Points and Economic Equilibria*, (2010), total 292 pages

③竹内惠行、(村田・吉原編)、文眞堂、『経営思想史への討究-学問の新しい形-』(現代統計学が２０世紀に与えた影響)、(2010)、41-56

６．研究組織

(1)研究代表者
浦井　憲 (Urai Ken)
大阪大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：00203597

(2)研究分担者
竹内　惠行 (Takeuchi Yoshiyuki)
大阪大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号：60216869

堂目　卓生（Doume Takuo）
大阪大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：70202207

(3)連携研究者

吉町　昭彦（Yoshimachi Akihiko）
同志社大学・商学部・専任講師
研究者番号：40440490

白石　晃三（Shiraishi Kozo）
神戸学院大学・経済学部・講師
研究者番号：80513548
（H21 年度、連携研究者として参加）